

すぎなみソーシャル・デザイン塾～杉並をデザインする社会起業家になる～
06年9月20日

第二章のテーマ 「地域みんなの学校づくり」

【はじめに】

杉並区教育委員会すぎなみ大人塾担当者より

今日から夜コースの第2章に入ります。年間のテーマとして「ソーシャルデザイン」を掲げていますが、参加者相互の関係も徐々にできてきたことですし、少し具体的なテーマ「学校」を設定しながら、ソーシャルデザインに取り組んでいきましょう。

「学校」をテーマとした背景には、社会状況の変化や教育改革により、学校で学ぶべき内容や学校教育制度が見直されてきているということもありますが、なによりみなさんの人生の中で何らかの学校体験をしていて、考えをめぐらすきっかけを持っているということ、暮らしの中で、敷居が低いかどうか別にして物理的に身近な建物として認知されていること、があります。

さまざまな立場、経験をお持ちのみなさんが、日々感じていることを出し合いながら、自由な発想を育てていきましょう。ここで、第二章のテーマについて、学んだり考えたりする参考資料として杉並区の教育に関する話題のメモを出しておきます。

杉並区の教育委員会では、「杉並区教育ビジョン」を定めるとともに、「教育ビジョン推進計画（平成17年度～19年度）」により課題解決に向けた取り組みを行っています。

今日お配りしたメモは、そうしたさまざまな取り組みのなかで、個人的に気になっていることなどを含め作成したものですので、課題のくくり方や言葉の使い方等、公的なものではありません。そうした前提でごらん頂ければと思います。

お手もとのメモでは、いくつか項目を挙げていますが、「3.教育の分権・住民の参画」「7.専門家のみによる指導から地域の教育力の掘り起しへ」については、行政がひとり頑張る進むものではありませんし、想定している「地域」というものを現代においてはどうとらえていけるのか不確かなこともありますので、こういった課題は、みなさんと考えていきたい“難易度の高い？”課題かなと思っています。

また、そうした関心と関連しますが、“公”がつくと、公園に代表されるように、「無関心で良い場所」「役所がなんとかしてくれる場所」になりがちですが、改めて“公立”学校の良さを掘り起こしていきたい、という課題もあります。そのためには「6.地域の核となる学校施設の活用」を、学校教育に支障のない範囲というような消極的姿勢を改め、より積極的・計画的に進んでいくようなしかけづくりにより、さまざまな地域住民の学校施設への愛着を高めていくことも大事ではないかと思っています。

【メモ】

- 1 公立の良さをいかしていくために
 - ・ここでの「学校」は、公立の小中学校とする。
 - ・公立の小中（高）の良さとは何だろう（意見を集める）
 - ・社会性を身に付けるところ
- 2 食育・徳育・キャリア教育
 - ・学校でできること、家庭でできること、地域でできること
- 3 教育の分権・住民の参画・・・皆で支え
 - ・地域運営学校（コミュニティスクール）の実施で見える課題
 - ・学校支援本部、地区教育委員会づくりで欠かせない視点
- 4 すべての人がともに学ぶ環境づくり
 - ・特別支援教育
 - ・帰国児童学習支援
- 5 ひとりひとりの成長に対応できる学校制度
 - ・9年間を一体の流れでとらえる小中一貫教育の実施で見える課題
- 6 地域の核となる学校施設の活用・・・学校教育に支障をきたさない範囲の見直し
 - ・子どものための施設から、防災拠点等地域みんなの施設へ
 - ・転居してきた方や未婚者等と学校との接点づくり
- 7 専門家のみによる指導から地域の教育力の掘り起しへ
 - ・学校教育コーディネーター、学校サポーターの活躍
 - ・杉並教育会の設立

【課題抽出ワークショップ 学校を多面的にとらえ課題を発見】

学習支援者 新谷大輔

9月20日から11月まで5回の講座のテーマを「地域みんなの学校づくり」としました、皆さんがどのようなソーシャルデザインを描くのか、学校と地域を題材にします。具体的に

* 各自が考える学校とか教育の課題

* 杉並区の考える学校とか教育の課題

をそれぞれ挙げてみたいと思います。

1 学校とは何でしょう？

課題を整理します。

- ・みなさんの身近に存在する学校という建物（ハード）・・・学校開放など
- ・先生・・・多忙である、杉並区独自の教員を採用する、心得など
- ・授業内容・・・カリキュラム（進行スケジュール）クラス編成、放課後など
- ・保護者・・・家庭のしつけ、学校教育へどのように関わるのかなど

では、四つのキーワードを元にワークショップを行いましょう。

2 学校の課題、学校への想い、教育上の課題などを、グループ毎に話し合う

< 7人グループ >

Aさん：教員免許を取得したが、結局先生にはならなかったが教育に関心あり。しかし、学校は選挙投票の時にしか行かない、日曜日に地域の人に校庭を開放していること程度は認識あり。

杉並師範館が杉並区で採用する教員養成をしているが、視野の広い先生を作るという意味で意義があると考えている。

保護者は自分の子どもに最低限の家庭教育をして学校に送り出す、学校では社会性を育てる人間教育をして欲しい、これが公立学校の役目と考える。

Bさん：某短大の教職に関わっているが、規律化、画一化された先生が多いと感じる。

「学校は学びの場」であるから保護者・親・PTA・地域などの教育上の課題が、学校並び先生に持ち込まれることはよしとしても、課題のトラブル解決を期待されるのはつらい。画一化した先生には答えは出せない。

Cさん：学校内で一日の大半を過ごす先生は、いつも忙しく、諸事に振り回されて余裕がない。保護者、子どもに対し事なかれ主義に陥いることはないか、学校や先生に対し、世間が抱いている危機感をどのように考えているのか。このような保護者などの危機感から、公立の小中学生が、私立学校へ合格することを第一と考えてしまうのではないか。

子ども問題は、保護者の問題であると考え、社会に対するモラル、しつけなどの家庭教育に気をつけたい。先生も、真剣に取り組んでいただきたい。

Dさん：公立の小学校に入れた経験を持つが、面白い先生もいることがわかった。「土曜日

の午後は絶対仕事をしたくないので、その日の午後は子どもと関わりません」といっていた先生が、その時刻には、元気をなくした子どもたちの話を聴いて、やさしく接していることがあった。公立学校のよいところかもしれない。

自分の子供を幼稚園から、受験体制に入らせる親の意識にも疑問を感じる。

Eさん：学校で学んで欲しいところは、学校以外の世界に出たときの対応力、低学年ではしつけ・挨拶などを身に付けて欲しい。当然保護者の家庭内教育とも絡むが、いやなことは自分の子供にも言わない風潮が気になる。

Fさん：学校のカリキュラムがどのように進行しているのか、課題が何なのかなど、学校の情報がほしい。学校の情報が外になかなか出てこないが、学校と地域との信頼関係はどのような状況なのだろうか。

学校と地域がよく結びついて、よい方向に向かっている学校をモデルにして考えていけたらと思う。

Gさん：社会的、経済的に恵まれた家庭が、高い塾費をかけて、子どもを幼稚園からの受験戦争に駆りたてる。よい学校は恵まれた家庭の子どもたちだけになりはしないか。そうなると公立学校の意義が薄れる、再度、公立学校のよさをみんなで考える、地域との連携を考えることなどをしないといけない。

< 7人グループのまとめ >

学校は学習の場、勉強の場である。公教育で一番大切なのは、子どもが社会性や躰を身につけるところ、ものの善悪を理解することを学ぶところである。

しかし、保護者や親が、礼儀・しつけなどを、自分ではやりたくない、できないということ、学校に押し付けるところではない。

< その他グループの意見、 >

学校について

- ・保護者、親の子どもに対する考えや、価値観が驚くほど多様化しているので、学校が一つの考え方で教育しづらくなっている、先生の戸惑いが分かる。一方、先生の子どもに対するコントロールができていない、やるべきことをやっていないと感じる。
- ・保護者は、なにかあると言葉で伝えなくて、メールなどで言いたいことを済ませる傾向がある、学校が戸惑う原因。

先生について

- ・教員採用となると一生、教職の地位に留まれる。良し悪しがある。子どもの成長を考えると、もう少し長期的な視点で接する必要があるのではないか、先生も受験戦争に巻き込まれているような気もする。

先生も保護者も短期的な判断で「この子はこういう子だ」と決め付けていないか、自制したい。

保護者、親について

- ・子どもが卒業して学校を離れると、学校と関わりが切れる。PTA, 地域との関係も薄れる。地域に関わるポイントは、学校に興味を持つことではないか。

3 意見発表後、新谷さんより

みなさんの意見を聞きながら前半のワークショップを終えました。答えを早急に出すことはしないで、日頃から頭に入れておきたいキーワードだけここに書き出しましたのでご覧ください。

- ・学校の目的と役割は？ ・家庭の役割は？ ・先生は何をする人ですか？
- ・先生はだらしがないのか？ ・体罰の是非(先生と子ども) ・ゆとり教育ってなに？
- ・塾って何するところ？ ・学力とは？ ・PTAは何をするの？
- ・教育を受けた人って？ (画一的になるのか、一芸に秀でるのか)

4 学校をめぐる課題を話し合う時に、できるだけ広い視点で討議する必要があると考えます。そこで「持続可能な開発のための教育(E S D)の10年推進協議会」という考え方を披露します。

1) United Nation Decade of Education for Sustainable Development(E S D)とは

02年9月 南ア・ヨハネスブルグで開催された世界首脳会議(W S S D)で日本政府は05年から10年間を「国連持続可能な開発のための教育10年」とすることを提案した。E S D 10年案は同サミットで賞賛され、国連総会は全会一致で採択され、ユネスコが主導機関に決まった。

生活と暮らしに関係する経済・社会・環境の3分野をバランスよく発展させることにより実現する社会を支える教育の概念です。05年9月に採択された最終実施計画では「地域に根ざした活動」「教員養成の重要性」「限られた省庁でなく政府全体で国内実施計画を作り取り組む」などが求められている。

2) 教育の分野：全ての領域に絡む教育のあり方を問うものです。

- ・従来型の教育では、期待される人間像に近づけるために先生が、生徒を指導していくという形でしたが、E S D概念では、互いに学びあう形になり、先生は教育のファシリテーターとなります。
- ・教育も多種多様化します、従来、考えてこなかった、異質なものとの連携を考え新し

い可能性を探るものです。

例えば、多言語多文化共生教育、環境教育、人権教育、福祉教育、地域歴史教育、平和教育など地球規模から、地域の課題までを視野に入れた教育理念と現状、未来を学習します。

テーマとして

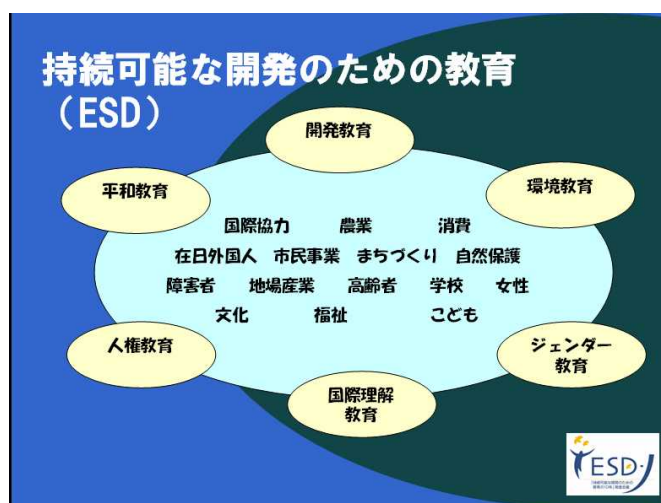
国際協力・在日外国人・まちづくり・市民事業・文化・性別・福祉・障害者・子ども・自然保護・農業・消費・地場産業など様々な切り口があります。

E S Dの目標として

単なる知識の獲得を目指すのではなく、未来を担う人づくりを行う。人格の発達や自立心、自律心などを養い、公共分野に主体的に参加し、持続可能な社会づくりに加わる人物像をE D S教育の力で実現しようというものです。

実例として、岩手大学では、同校の前身である盛岡高等の卒業生・宮沢賢治の言葉「世界ぜんたいが幸せにならないうちは個人の幸福はありえない」を契機にして全学共通教育の全科目にE S D理念に基づいた教育カリキュラムを盛りこみ始めています。

活動実例



- 1) 持続可能な開発のための教育の10年」推進会議 (ESD-J) の活動

<http://www.naturegame.or.jp/esdj/nikki.php>

- 2) 持続可能な開発のための教育10年 (ESD) さいたま EDS-Sの活動

<http://www.e-tiiki.net/g/e/index.htm>

E D Sの概念を理解するための地域ミーティング・E S D研修を行っている。

- 3) 岩手大学の活動

<http://chizai.iwate-u.ac.jp/esd.html>